

歌道雜誌

# 不二

旅と歌特輯號

五月號



不二出版社

昭和二十二年五月一日印刷  
昭和二十二年五月五日發行  
昭和二十一年五月十日 第三種郵便物認可

第二卷 第五號 通卷第十一號



りに、行末もいかゞなど申して、香坂高宗などしきりにとゞめ侍りしを、猶ふりすて出で侍りしに、そなたと思ひしかたも又さうゐする事ありしかば、中空にたゞよひし頃よみ侍りし

しばしに吹かぬまもがな風のみへにたつ塵の身の  
ありか定めむ

旅の憂ひが重なり積つて、世に疲れを感じさせ給ふ事も度であらせられたらうに、親王は生きつゞけられる。ここに、後々戰場の間に發せられた「君がため世のため何か惜しからむすてかひある命なりせば」の御感慨もしみじくと哀れなのである。

尾張、駿河と取つて返し、甲斐に出て信濃へ立ち戻られた。三年ばかり更級の郷に假住居せられる。正平三年一月に四條駿の戦、後村上天皇賀名生に遷幸、吉野行宮焼亡といふ悲報が至る。正平四年宗良親王は新田義興等に迎へられて移り給ふ。正平六年十一月南北和議成つたが、尊氏の叛意明瞭となつたので、正平七年親王は義興等に奉せられて、鎌倉の尊氏誅伐に出でたゞせられ、一度は目的を達して鎌倉を取つたが、間もなく閏二月廿六日小手指原の役に大敗した。この戦場出陣の御覺悟が、かの君がための一首である。これより親王は越後又は信濃に走られたと傳へる

正平十年から文中三年の約二十年間は、信濃の大河原の谷に埋れて過し給ふ。その末頃までに李花集の歌はまとまつたのである。文中三年の冬、六十三歳の老いたる御身を驅つて賀名生の行宮に参り給うたが、共に見し世の人もなく語り合はす人も既に亡し。親王御入來を機として、天授元年一月に五十番の歌合、六月に五百番の歌合、天授二年四月に百番の歌合が催され、親王は判者となられた。三年春には千首歌が行はれ親王も加つてをられる。天授四年には大河原に戻り給ふ。それから一年間をおいて六年に三度西上し、河内國山田に住し給ふ。この西上を機として撰び給うたのが新葉集であり、親王の御齡七十歳、弘和元年十二月三日に奏覽に供し奉つた。其の後東下し、元中二年八月十日井伊城に薨去せられ、時に御齡七十四を算ふるか。薨去の地に就いては異説がある。

長い御生涯を終へられるまで、終に故郷へは夢にのみ通つて、旅衣をぬぎ給ふことが出来なかつた。假の宿を轉じ又轉じた御身を自ら空をめぐり又めぐる月にたとへられた御一首を最後に録し奉つて冗文を結ぶ。

さのみかくわれにもあらずあくがれゆく身のし  
きなげき侍りける頃、月をみて  
月も又同じ空をぞ行きめぐるさのみや旅のやどをとくべき

二二、三、一七

## 奈良には古き佛達

——芭蕉の大和の旅——

### 田中克己

芭蕉の生國伊賀は大和の隣りである。このことがまた理由の一つともなつて、芭蕉はたびたび大和の國に来てゐる。いつどこを歩いたか、漠然と考へてゐたことを、編輯子の命によつて急いで調べてみるのも現在大和住ひの私にはなかなか楽しい仕事であらう。

はじめての旅は恐らく二十三歳だつた寛文六年、生涯仕へる心算だつた蟬吟の遺骨を奉じて高野山へ行つた時の道すがらだつたであらう。この旅では芭蕉は形をかへた出家のことをあれこれと考へあくみながら、歩いてゐたことであらう。句は作れたかどうか。もとよりいまは存してゐない。

二度目の旅は貞享元年、その四十一歳の時、もう俳諧の宗匠としての地位も定まり、弟子千里を伴つて東海道を下つて参宮し、十二年ぶりに歸郷してからのことであつた。それゆゑこれまでに見える大和を詠じた句

うかれける人々はつせの山櫻  
汗水やよし野泊りの笈山伏  
星合の中や絶えなむ龍田川  
等の句は觀念で詠じたもので景に即しての句ではあるまい。そのためもありかこれらの句は一向に面白くない。

まだこの年の句では例の「奈良七重七堂伽藍八重櫻」があるが、これも旅に出るまへのもので、實景を見ての作ではなからう。奈良のことを巧みには

云ひ表はし、有名ではあるが、「野ざらし紀行」には見えずやはり觀念的だからである。

「野ざらし紀行」によれば、伊賀上野に歸つたのは九月初め、十日ほど滞在してから、出立したことのみ記し、道すぢも説かず、南都の吟もなく、千里の郷里たる葛下郡竹の内に行つたことから記し、こゝでの句

綿弓や琵琶になぐむ竹の輿  
を記してゐる。ついでこゝからすぢの當麻寺に参詣し、樹齡千年以上にもならうといふ庭上の松を見て、

僧朝がほいく花かへる法の松  
と詠じてゐる。千年の松といへば曼陀羅を作つたとの傳説の中將姫の頃にもあつた筈である。この國へ來れば他國以上に懐古的になるのは芭蕉のみとは限らない。

千里はこゝへ残して、吉野へはひとりで赴き、ある坊に泊つての吟が  
砧打て我に聞かせよや坊が妻  
の句である。花の頃でもない吉野へ行つたのは芭蕉の最も尊敬した、西行法



師の跡を慕つたからであつて、その庵の跡へは翌日赴き、とくとくの清水を以て

露とく／＼こゝろみに浮世すすまばやと詠じ、秋の日は斜めになつたので、他のところを見残しながら、つぎには後醍醐天皇の陵に詣つて、

御廟年をへてしのぶは何をしのぶ草と詠じた。しのぶ草は御陵のところに實際に生えてゐたのであらう。芭蕉は太平記を愛讀してゐたことと思ふが、このときの懐感を「何をしのぶ草とこちらこそくはしく聞きたい氣がする。ともかくこの年の大和の旅のことはこれだけが紀行に見えてゐて、芭蕉はすぐ山城、近江を経て美濃に入り、大垣多度、桑名、熱田、名古屋を通つて年末には上野に歸つた。

しかし翌二年、二月には再び大和に赴き、道すがらの吟  
春なれや名もなき山の薄霞を記す。名もなき山は上野から南部への途の添上郡の山々の一であらうか。今年の大和の國は寒さがこたへたが、

けふから香久山にも三輪山にも布留の山にも霞が立ちはじめた。新聞によれば二月堂のお水取はけふからである。芭蕉の來たのは曆こそちがへ、ちやうどこのころであつたと見えて、次には二月堂に籠りてと題して、

水取や氷の僧の香のおとの句が記されてゐる。けふの暖いのは例外で、お水取りがすんではじめて春暖くなるのはこの邊りの云ひ慣はしてあるから、芭蕉の籠つた夜はちやうど餘寒のきつい晩だつたと見える。ここから奈良坂を越えて京にゆき、名古屋から中仙道を上つて甲斐に入り、四月末深川の芭蕉庵に歸着してこの旅は終りを告げたが、翌年の作なる「視好む奈良の法師の炬燵かな」はこの旅の感興を詠じたものに相違ない。

貞享四年、四十四歳になると旅への誘ひはますます強くなつたか、夏、鹿島湖來に行つたので嫌らず、十月には庵をひとに預けて江戸を出、三河の伊良湖崎に杜國を訪ね、吉野への同行を約した。「鷹一つ」の句はこの時の所産

都

である。上野に歸つたのが十二月、翌五年(元祿元年)、二月に參宮したのち、三月中旬來り會した杜國を連れて吉野への旅に出た。今度の旅の記は「卯辰紀行(芳野紀行)」となつて残つてゐる。これによれば「旅人とわが名上はれん初時雨」の句によく表はれた旅情の目的地は、はじめから吉野で、露沾公からはなむけの句として賜つた句がすでに「時は多よし野をこめん旅のつと」といふのがその證據である。

上野から吉野への道筋は菊山常年男氏によれば「(はせを)一七九頁以下」上野で「吉野にて櫻見せうぞ檜木笠」の句を杜國に與へ、杜國から「吉野にて我も見せうぞ檜木笠」の返句を得たのち二人の採つた道筋は、佐那具、神戸、阿保の里を経て種生の廣い兼好塚を訪ね、こゝから名張へ出て、參宮街道を西に歩み、大和路に入つた。旅の具多きは道のさほり「だといふので紙衣一つ、合羽のたぐひ、硯、筆、紙、藥、晝齋當など物に包んで背負つただけであるが、疲れて困つたと紀行には

しるす。

草臥て宿かるところや藤の花は名張の詠か、初瀬では

春の夜や籠り人ゆかし堂のすみ足駄はく僧も見えたり花の雨(杜國)どれも佳い。

初瀬を出てむかしの海石榴市(今の金屋)まで來ると葛城山が見え出す。猶見たし花にあけゆく神の顔はこのあたりの句であらう。一言主神を思つてゐるのである。

三輪で多分、大神神社に詣り、そこから南多武峰街道を進む。筆者の假住ひから三十間とはなれてゐないところを、芭蕉は通つたのである。多武峰での吟はなく、鹿路から躰峠(今の細峠)まで來て一休みして、

雲雀より空にやすらふ峠かなの句が成り、峠を下りた龍門村では龍門の花や上戸の土産にせん酒のみにかたらんかゝる瀧の花と詠ずる。西河では

ほろほろと山ぶさちるか瀧の香この句は佳い。次は蜻蛉が瀧とのみ記

して句はない。紀行にはその次に布留

の瀧、布引の瀧、箕面の瀧のことがあつたのは芭蕉の話が紛れ込んだか、布引の瀧は攝津の生田川の上、箕面の瀧は同じく攝津の國である。布留の瀧は今の丹波市町瀧本にあるが、こゝから引返してわけでは毛頭ないゆゑ、變であるさといふ／＼待望の櫻が見え出した。日は花に暮てさびしやあすならう。扇にて酒くむかけや散る櫻。みな佳い。若清水では、

春雨の木下につたふ清水哉しかし吉野では花に三日引留められたが、あまりにあついで何も句が出来なかつたと残念がつてから、芭蕉は吉野川に沿つて西へゆき、高野山に上りなほ西して和歌浦、紀三井寺を見物し、大和へまた歸つたが、途中衣更へをする。

ひとつ脱いでうしろにおひぬ衣がへよし野出て布子賣たし衣がへ(杜國)弟子の句も面白い。四月八日には奈良に來た。春日神社の鹿はこの戦争で食

はれて殆どなくなつたが、芭蕉の來た頃はうかつに殺せば石子責めの刑があつた時代である恰も鹿の子を産むのを實見した。

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな次いで奈良の西部の唐招提寺に參つて、鑑眞像を拜み、

わか葉して御目のしづくぬぐはばやとありがたがつてゐるがはるばる佛法弘通のために渡海の途中、暴風に會つて海南島に漂着し、兩眼盲ひてなほ願ひをすてなかつた高僧にはこの尊崇も當然である。木像もこの和上にふさはしくよく出来てゐるのである。

奈良に引返して舊友と別れるとき鹿の角まづ一ふしのわかれかなこゝから大坂へ出るのであるが、道は龍田を通つたか、後の時のやうに關峠を越えたかこの紀行には記さない。

翌元祿二年が「奥の細道」の旅。この紀行の最後は周知の如く伊勢參宮するとて各分、桑名あたりで舟にのつて蛤のふたみにわかれゆく秋ぞの句で終つてゐるが、十月伊勢から上



# 新雪

浅野 晃

きよりは新雪だ

茶の間でいちにち、子供は昔語の繪

本をみている

妻はストーブに薪をつぐ

僕は聖賢の書をひもとく

粉雪はいよいよ降りしきり、窓はし

だいに暗くなる

やがてそれは重くなるだろうに

ああ、ふかい智慧の言葉よ

粉雪のようにあまりに軽く、それは

僕のなかへと降る

風にもめげず降る雪はやがて重たく

積るのであろうに

ああ、それはまたあまりに軽く

僕のなかへと降る言葉よ

窓はいよいよ暗く

もはや夜にはいる雪のけはい

昔話の繪本をみるは子供

ストーブに薪をつぐは妻

聖賢の書をひもとくは僕なのに

ああ、ふかい智慧の言葉よ

もつと重たく重たく降つて

僕のなかへ積つてくれ

野に歸り、また奈良、京へ赴き膳所で

年が暮れた。この時の奈良の句が

はつ雪やいつ大佛の柱たて

である。

芭蕉の最後の大和訪問は元祿七年、

五十一歳の夏、東海道を上り、上野、

京、近江と歩いたあと、また上野にかへり、九月八日支考、惘然をつれ、次郎長衛と又右衛門とに荷物をもたせて出發した。道筋は菊山氏に據れば、小田馬苦勞、三本松峠、島ヶ原、大河原笠置を經、加茂から盤若坂にかゝつて奈良に入つた。夜は奈良泊りで、三句が成つた。

菊の香や奈良には古き佛たち  
菊の香や奈良は幾代の男ぶり  
びつと啼尻聲悲し夜の鹿  
翌日は闇峠を越えて

菊の香にくらがり登る節句哉  
いかにも九月九日の重陽の節句に當つたのであるが、前日、悲しく聞えた鹿の聲は虫が報せたか、この時恐らく峠から見返した奈良の平野と山々はこれが見おさめとなつて、翌月十二日翁は弟子たちに取圍まれながら大阪御堂前南久太郎町の花屋の裏座敷でなくなつた。終焉の四日前、最後の句が成つた。「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」、ゆめに出て來た枯野はどこかの野か或ひは鹿の臥す春日野だつたかもしれない

## 都を戀ふる歌

國守 健

やまとは くにのまほろば たたなづく 青垣山 こ  
もれる やまとし うるはし

旅の途中に倒れられた日本武尊の辭世の御歌は四首傳へられて居るが、そのうちここに掲げた御歌と次の「いのちのまたけむひとは」の御歌とは思國歌即ち「くにしぬびりた」と呼ばれて傳へられて來た。この國はふるさととの意であると共に都の意である。やまとは尊にとつては生れ故郷であり、妻子の居る古里であると共に、また君にしてみ親なる陛下のおいでになる都であつた。

日本に於ては旅と歌とは不可分のものであるが、それは生活と歌の不可分を示すものでもあらう。その旅の途中に於て常に親妻子の居るふるさとの方を戀ふて止まないと云ふことはまことに人情の自然であるが、更にもつと深いところで大君います都の方を戀ひ慕ふて止まないと云ふこと

もまた日本人の眞情に於ては至極自然のことであつた。その都とふるさととが、尊の場合に於ける如く、又萬葉の多くの場合に於ける如く全く、一致して居る際は勿論であるが、一致してゐない場合に於てもなほ且つこのことは自然に行はれて來た。一致してゐない場合には、都をより大なる心のふるさといのちのふるさととして戀ひ慕ひ仰いで來た。

この點を若干の旅の歌を擧げることによつて少しく跡づけて見たい。

前掲の尊の歌は古事記に傳ふる所であるが、萬葉には此の種の旅の歌は枚擧にいとまない程多く傳へられて居る。いざ子どもはやもやまとへ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ

「山上臣憶良、大唐に在りし時、本郷を憶ひて作れる歌」と詞書ある憶良作であるが、かくの如き海彼千里の外地に立つて都も故郷もひつくるめての、祖國日本を戀ひ思ふ切情は特にここ十年來の我が國の青年がまざまざと親しく身に痛感して來た所であらう。終戦時外地にあつた者に於てこの思ひ更に切實なるものがあつたに違ひない。ここに於ては「やまと」は既に近畿の意味から全日本にまでひろがつて居る。

しかし萬葉に於てはこのやうな海彼への旅の歌の例は少い。次に掲げる如きものがその大部分である。  
葦邊ゆく鴨の羽交に霜ふりて寒き夕は大和し思ほゆ(志



不二出版社新刊書

影山正治著

# 歌集 一すぢの道

B七型 (ポケット型)  
二七〇頁 定價卅八圓  
六月下旬發賣予定

「民草の祈り」に續く影山先生の第六歌集、即ち昭和十九年秋の千里出征より二十年八月の終戦の大事を經二十一年五月内地歸還に到る迄の五百余首を収めたものである。

三浦義一著

# 歌集 當觀無常

定價 未定  
送料 五圓

原田春乃著

# 歌集 しらたま

定價 三十三圓  
送料 五圓

藤田徳太郎著

# 日本歌謠史

定價 未定  
送料 五圓

## 編輯後記

○茲に創刊一週年を紀念し旅と歌特輯號をお送りする。久方振りて諸先生方の筆も揃ひ内容も相當に充實し得たと思つてゐる。  
○「古人も多く旅に死せるあり」とは芭蕉の言葉であるが、まこと我等は千代の古道の道にこそ死なんと誓ふ旅人である。我等が旅に死せる古人の風詠を慕ひ、旅の歌を通じて道の深奥にふれゆかんとする、所以ここにあると信ずる。かかる意味に於てこの特輯號が編まれたのである。諸兄の清鑑を得れば幸甚である。  
○本號より縮尺版となつた。この所出版事情は現在よりもつと惡化する傾向にあり、それに備へての體制であるから今しばらくの間は御辛棒願ひたい。尙念のために申して置くが今後如何なる悪條件が来やうとも本誌だけはあらゆる困難を排して發行を続けようと思ふのであるから御安心願ひたいと思ふ。  
○本號は紙面の都合で「不二歌壇」「日本の聲」等全部割愛した。誠に残念であるが御諒承願ひたい。  
○去る四月二十六、七、八の三日

間本社中一同黒田先生等と共に讀んで宮城内の勤勞作業を仕へ奉つた。恐れ畏き九重の奥深く參入し參らせ御苑の塵のいさかきを掃ひ盡し難くたゞ感泣の涙を拂ふのみであつた。いづれその模様は詳しく本誌上に掲載するつもりである。○資材暴騰の爲止むなく又誌代の値上げを行ひ普通定價六圓(本號のみ特價八圓)とした故不足誌代御納入の程お願ひする。

|    |     |          |
|----|-----|----------|
| 不  | 二   | 第一號      |
| 普通 | 半ヶ年 | 三十六圓 郵四圓 |
| 定價 | 壹ヶ年 | 七十二圓 郵八圓 |

昭和二十二年五月一日印刷  
昭和二十二年五月五日發行  
東京部 澁谷區青山車庫前  
編輯兼 發行人 藤井 一郎  
東京部 新宿區市谷加賀町一ノ二  
印刷所 大日本印刷株式會社  
印刷人 小坂 孟 (東京一)  
東京部 澁谷區青山車庫前  
發行所 不二出版社  
振替東京一九〇四〇一  
郵給元 日本出版配給株式會社

特價 八圓